

## 「むかし、いま、これから」

芸術文化学科三十五周年の記念パーティーが催されたのは、私の回顧的個展が大分市美術館主催で催されている会期のさなかであった。別府湾ロイヤルホテルの一室でなつかしい何人かの卒業生と握手を交わし、大分のホテルならば散会のと美術館まで同行出来るものと、少し残念な気持ちがあった。

前身の美学美術史学科の創設が一九七三年、随分昔のことになる。当時の佐藤義詮学長が、美術、音楽、演劇、舞踊という総合芸術学科が昔からの夢だった、と語ってくれた。「君が居るからスタート出来るんだよ」とまで言われて感激したことを覚えている。

最初の実技コース学生は沖繩と大分からの二名だけ。備品もなにもなく、ただ若さと情熱だけが頼りの創設期であった。三十周年記念誌にも書いたが、学生との交流、そのファミリーな雰囲気は、私にとって人生最高の思い出となっている。絵を描くか、酒を呑むか、それ以外は何もしたくない怠けものの私が、学生と教室で語り、研究室でカンパイし、青春を共有する楽しい日々を過ごすことが出来たのは奇跡といえよう。科の運営が軌道に乗り始めた頃、背中に堪えられぬまでの痛みを覚え入院。胃の半分以上切

除するという羽目になったことは、心労の果とはいえ、口惜しい思いが残っている。

星霜三十五年、重苦しく儂くも時代は移りゆく。変転する社会情勢、科の将来を誰も予測することは出来ない。北九州出身の愛すべき卒業生は、アフリカの各地をひとり気儘に歩いている、と地図を説明しながら話してくれた。旅費は半年ほど自動車工場で稼ぐのだという。最近音沙汰が無いので心配している。フランスに語学留学したまま帰って来ない女子卒業生もいる。アメリカで結婚しアーチストとして活躍している女性もいる。身近な心配ごととは絶えないが、世界はいま政治、経済の危機的様相をほらんで権力闘争に明けくれ、混沌の渦中にある。「世界はうつくしい」とある詩人は文字を連ねるが、いかに生きるか、が現代人の宿命的課題であるだろう。生まれて以来私の人生は戦争の時代である。世界は戦争を生き、戦後を経験しつつある。いかに生きるか、を問い模索しつつ。

梅雨空、小雨の中、庭先の畑で新鮮な野菜を眺めるときがある。その成長変化の激しい時間とカタチには、心弾むものがある。老境に入った最近、植物の成長に素直に感動し感謝するおもいが強い。空と海が一体となった窓外の

夕暮風景もまた、暗く闇につつまれるまでの時間は限りない慰めとなっている。風景もまた晩年の眺めがこのように美しい、のだとひとり思う。

(別府大学名誉教授)